



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.82

日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2014年9月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.icom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

ジャズを巡る“心の交流”で盛り上がった2014年「サッチモの旅」

復興へ…ニューオリンズ・ジャズ博物館に\$10,000寄贈

A列車でハーレムへ、アポロ劇場でのアマチュアナイト鑑賞も貴重な体験

2014外山喜雄&セイントと行く「サッチモの旅」。今年はSightseeingとしての“ニューオリンズ観光”がまったくなかったが、外山夫妻&ツアー参加者とニューオリンズやニューヨークでのジャズを巡る“心の交流”が、かつてないほどの盛り上がりを見せた。ランドリー・ウォーカー高校訪問、ルイ・アームストロング、ジョージ・ルイスゆかりの地を巡るジャズツアー、ニューオリンズ・ジャズ博物館へ義援金寄贈、デトロイト・ブルックスへバンジョー寄贈、サッチモ・サマーフェスト、ジャズ・ミサ、NYではマンデイナイトJAMやアポロ劇場でのアマチュアナイト鑑賞、ハーレム・ジャズ博物館へのJATP日本公演記念写真の贈呈、jazzmobileへはトランペットをプレゼント、…ets, ets. 心に残る素晴らしいツアーで、外山夫妻は、まさに休む間もなし。まずはジャズ博物館での贈呈式の模様からをお届けしましょう。(小泉良夫)



サッチモのホルネットを前に笑顔がはじける外山夫妻 LA州副知事、博物館名誉館長も列席して贈呈式

写真上は、サッチモが最初に手にしたホルネットを前に…左から恵子さん、石井一さん、外山喜雄さん、1人おいてツアー参加の古川博さん=NOLA.com/The Times-Picayune から。写真左は、外山夫妻(中央)から1万ドルの小切手受けるジェイ・ダーデン・ルイジアナ州副知事(手にしているのは、日本の寄付金贈呈者リスト)、右端は、ドン・マーキス・ジャズ博物館名誉館長=いずれも閉鎖中のジャズ博物館2Fで。左上のサッチモをあしらった印刷物は、ことしのサマーフェスト・ガイド。3日間にわたるコンサート、セミナー情報などびっしりと掲載されている

今年のハイライトはジャズ博物館でのプレゼンテーション ルイジアナ州副知事らVIPも顔を揃える タイムズ・ペキュン紙のシーラ・ストロープ記者が写真と共に同紙に活写

今年2014「サッチモの旅」のハイライトは8月1日、フレンチ・クォーターにあるニューオリンズ「ジャズ博物館」(ルイジアナ州立博物館分館、旧造幣局=Old U.S. Mint)2階で催された日本からのジャズ博物館復興支援の義援金贈呈式だった。このジャズ博物館への寄付金募集をWJF会報「ワンダフルワールド通信」(3月発行の80号)などで会員の皆さんらに呼びかけるや否や、みるみる100万円超が外山夫妻のもとに寄せられた。それを1万ドルの小切手に換えての贈呈式。

会場には、ジェイ・ダーデン・ルイジアナ州副知事、マーク・タロスJr.ルイジアナ州立博物館ディレクター、スーザン・マクレイ・ジャズ博物館財団ディレクター、ド



外山夫妻と州副知事…左奥はマーク・タロスJr. 州博物館ディレクターとスーザン・マクレイ・ジャズ博物館財団ディレクター

自治大臣)がこれに応える。

毎年、外山夫妻を取材し、「タイムズ・ペキュン紙」に大きく取り上げてくれているシーラ・ストロープ記者が、今回も姿を見せ、素晴らしい写真とともに、その模様を活写してくれている。ここは以下、シーラさんの記事にスペースをお譲りする。



Yoshio Toyama's Jazz Foundation launches fundraising effort for 'Louisiana Music Experience' exhibit

サッチモが初めて手にしたコルネット これこそ外山さんとWJF設立の原点

8月1日金曜日の朝、旧造幣局2階で、外山夫妻は、陳列ケースのホーンに驚嘆の目を見張った。外山さんにとっては、まるでキリストが最後の晩餐に用いた聖杯にいきなり出くわしたようだった。

「ほう！」彼のささやきは畏敬の念で満たされていた。

彼はルイ・アームストロングが少年院で手にした最初のコルネット(写真右)を見つめていた。この日本の著名なトランペット奏者・歌手として外山さんの人生は、アームストロングに大きな影響を受けた。そして、このコルネットこそ、外山さんが1994年にスタートさせ、ニューオリンズの子どもたちに楽器を贈ってきたワンダフルワールド・ジャ

ズ・ファウンデーション(WJF=日本ルイ・アームストロング協会)設立のインスピレーションでもあったのだ。彼らは過去20年間にニューオリンズへの訪問で、日本からの800点以上の楽器を持ってきた。

数年前、そのコルネットがどのようにWJF設立につなが

ったのか、外山さんがニューオリンズの若いミュージシャンのグループに話しているのを私は聞いている。

彼は少年たちにこんなことも話した。プリザベーションホールで巨匠たちからジャズを学ぶため、60年代に彼と恵子は新婚夫婦としてニューオリンズにやって来た。1968

年から1973年までここで暮らし、その後、日本でジャズを演奏するために帰国した。1990年代の始め、彼らがマルディグラを見るために戻ってきたとき、彼らはマーチングバ



ンドのメンバーがガタガタでロボロの楽器で演奏しているのを目の当たりにして驚いた。さらに町に暴力がはびこっていることも知って驚かされた。

彼は、彼のアイドル「ポップス」ことアームストロングが、少年時代に銃を撃つトラブルを起こし、少年院送りとなったその罰が、最初のコルネットのレッスンに彼を導いたことを説明した。

「私たちは、銃や麻薬に囲まれているサッチモの町の子どもたちに楽器を贈りたいと思ったのです。『彼らがトランペットを手にすれば、ルイ・アームストロングのようになるのかもしれない』と私は考えていました。ニューオーリンズは、豊かな伝統で彼を育て、彼は音楽の全世界を変えてしまったのです」と彼。

歴史を飾った貴重な楽器に目を見張る すべて新しい展示場での再登場を待つ

先週、外山夫妻と彼のバンド、デクシーセイイツは巡礼の旅のようにやってきて、恒例のサッチモ・サマーフェストで演奏し、アームストロングに敬意を払った。彼らは金曜日の朝、特別な贈呈式をするためにフレンチ・クォーターにあるこのルイジアナ州立博物館分館の旧造幣局にもやってきた。ハリケーン・カトリーナで旧造幣局の建物やコレクションの一部が損傷を受け閉館が続くジャズ博物館の復興と、最先端技術による展示公開に向け、日本のジャズ愛好家たちから義援金1万ドルを集め、持ってきてくれたのだ。

贈呈式に先立ち、彼らはサッチモのコルネットや1897年米 C.G.コーン社製のシドニー・ベシェのソプラノサクソ(写真上の下段)、そしてハリケーン・カトリーナで堤防が破壊され水浸しになったファッツ・ドミノの白いスタインウェイのグランドピアノ(同上段)など、いくつかの記憶に残る楽器に感嘆の声を上げた。このピアノは、ハリケーンで被災した第9区のファッツの自宅から回収され、丹念に復元されたものだ。これらの楽器はすべ

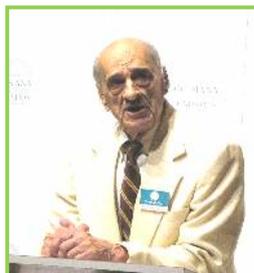


プレゼンテーションのため、外山夫妻とともにジャズ博物館入るツアー参加者のみなさん

てルイジアナ音楽史とも言うべき新しい展示場の一部となる。

プレゼンテーションの時間となって、マーク・タロスJr. ルイジアナ州立博物館ディレクターが、外山夫妻とのツアーに同行した、日本からのジャズファンに歓迎の言葉を贈った後、これを機会に、博物館財団が

展示を完成させ、公開するための大々的な募金キャンペーンを開始することを説明した。



「私たちの音楽はまさにこの州の‘ハート・アンド・ソール’…心であり、魂なのです」と彼。

続いてジャズ博物館財団のディレクター、スーザン・マクレイさんがドン・マルキ氏(写真左)を紹介した。マルキ氏

は、1977年から1996年までこのジャズ博物館の館長を務め、いまは引退して名誉館長となっている。

彼女は、マルキ氏がいま計画中の展示再開について、

世界中のジャズ愛好家の友人と連絡をとり、すでにスウェーデンやノルウェー、イギリスからも寄付がよせられて今回の日本からの寄付を合わせ、義援金はすでに2万ドル近くに達していると語った。

「そして、ドン・マルキさんの活躍は、まだ続くのです。次はフランスからもご寄附が来るようです」とマクレイさん。

その後、マルキ氏が外山夫妻を紹介した。彼は、夫妻が若いカップルとしてニューオーリンズにやってきた60年代からずっと友達で、彼らは毎年のように戻って来ていると話した。

「彼らは決して自分たちだけでニューオーリンズに来るようなことはありません。彼らはいつも楽器やツアー客の皆さんともどもやってくるのです。そして今年、彼らはまた、多くの人からのとても、とても高額な小切手を持ってきてくれました」と彼。



全寄贈者のリストを副知事に手渡したあと… 「それだけではありませんよ。この小切手も」

最後は、外山さんがジェイ・ダーデン州副知事に彼のプレゼンテーションを行う時間だった。

「あなたの町とアメリカはジャズという最高の贈り物を世界に与えてくれました。私たちはそんなニューオリンズと、そして私たち夫婦がジャズを勉強したとき、私たちにとっても親切にしてくれたすべての人々に感謝いたします」と彼。

彼の説明では、彼はこの寄付金を調達するため、月刊のニューズレターなどをあちこちに送った。ジャズ博物館の展示復興のため、「ちょっとだけ助けてほしい」とWJFのメンバーらに依頼したのだ。彼はまず副知事に寄付金を寄せてくれた人たちのラミネートされたリストを手渡した。

「私があなたに差し上げるのは、このリストだけではありませんよ」と彼は冗談を言ったあと、「私たちは、この小切手も進呈いたします」と。

副知事は惜しみない贈り物を寄せてくれた外山夫妻とその友人たちに感謝の言葉を述べた。

「ルイジアナ州は、情熱的なものが沢山ある所です。特に私たちの食べ物と私たちの音楽。それらすべてはジャズが元になっています」と彼。さらに「私たちは、まだかなりの金額を調達する必要がありますが、決して乗り越えられない金額ではありません」と。

彼は、2018年開催のニューオリンズ建設300年祭には皆さんで戻ってきて、常設展示を見てほしいと誘った。

「この建物は見違えるようになりますよ」と。

2階の全フロアと3階の1部を占める最高級の音楽展示場を完成するために必要な500万ドルは、民間の寄贈者や州からもたらされることになる。これらのお金は、クラレンス“ゲイトマウス”ブラウンのフィドル(ハリケーン・カトリーナ

の後、発見された時のまま、バイオリンには水のあとがつきばらばらの状態で、ケースに入って展示されている)を復元することやら、著作権で保護されている音楽や映画を使用する権利料に至るまで、ありとあらゆることに使用される。

「テクノロジーは、この25年間でずいぶん進んできましたから、この展示場は、皆さんが現在最新のものとして期待なさっているあらゆる種類の素晴らしい設備を備えることになるでしょうね」と、マクレーさんは私に



サッチモのホルネットを囲んでみなさんお揃いの記念写真、ハイ、パチリ！
左端は名誉総領事のダナ・フレイシさん

話してくれた。

ジャズコレクション展示がその大部分を占めるようになるが、それはまた、ニューオリンズとルイジアナ州にルーツ

を持つ他の音楽の重要性にも焦点を当てた展示となる。

将来の博物館のプレビューをご覧になりたい場合は、開催中の「キーピング・タイム展：ルイジアナ州音楽の過去の特別画像」をご覧になるといい。現在展示中の楽器に加えて、1万2000点以上の博物館の写真コレクションから



シドニー・ベシェのソプラノサクソスを囲んで=NOLA com/ The Times-Picayune から

選び抜かれた50点の思い出に残る写真が展示されている。それらの写真は、ルイジアナ州の音楽がいかに多様性に満ちているかを教えてくれる。

贈呈式が終わったあと、私はこの「キーピング・タイム展」を覗いてみた。そこには、1960年代のプリザベーションホールの夜から、私の父が大好きだったミュージシャンの写真3点が展示されていて、私はとても嬉しかった。パーシー・ハンフリー、オスカー“パパ”セレスティン、そしてスイート・エマ・バレットだ。帽子から靴に至るまで真っ赤に身を包んだウォルター“ウルフマン”ワシントンの最近の写真も、楽しかった。

アフロヘアの「ニューオリンズ・ソウルの女王」イルマ・トーマスの1975写真には、私はつい微笑んでしまった。ブルース歌手で元タクシー運転手、メーム・シャノンの写真もしかり。私は1996年、彼のタクシーの助手席に乗って、彼をインタビューしている。

ニューオリンズ郊外のメタリー・ナイトクラブで撮影された1931年のルイ・アームストロングと彼のオーケストラの写真もある。写真横の説明は、「世界の全音楽を変えた男」が耐えなければならなかったルイジアナ州の当時の状況を、改めて思い出させるものだ。解説にはこう書かれていた。「人種差別法のためにクラブを閉め出された何千人もアフリカ系アメリカ人のファンが、アームストロングの姿を一目でも見ようとクラブの外で待っていた」と。

**1万2000点の記録写真から厳選した50点
好評だった外山さん撮影、キッド・オリーの写真**

ルイジアナ州立博物館の歴史家、カレン・レーゼムさんは、ぜひこの写真を見ていただきたいのですと、外山さんをキッド・オリーの写真の前に連れて行った。展示のために厳選したオリーのすべての写真の中で、みんなこの1枚が一番好きだったと、彼女は外山に言った。

彼女はオリーのトロンボーンが展示されたケース(写真右)の前に外山を連れて行き、横の写真説明を示した。偉大なジャズ・トロンボーン奏者、キッド・オリーが、1919年にニューオリンズを離れた後、初めて帰郷、出演したコンサート、1971年のジャズ&ヘリテージフェスティバル・コンサートのリハーサル中の写真。説明には、撮影者、「Yoshio Toyama」のクレジットがあった。





Donations from JAPAN
for The New Orleans Jazz Museum
through the Wonderful World Jazz Foundation in Japan

ANDO, SYUJI ANZAI, EICHI AOKI, HIDEOMI AOYAGI, MASAKO ARAI, KAZUO ARAI, KIYOSHI ARAI, MASAO OHNO, REIKO DOITA, YASUSI ENDO, YASUHIRO FUJISAKI, YUICHI FUKUDA, TADAMICHI FURUKAWA, HIROSHI HAMADA, MOTOAKI HATAKEYAMA, NAOKO HAYASHI, YOSHIHIKO HIDA, TOSHIKATSU HIGOSAKI, EIJI HIROTSU, MAKOTO HONMA, YASUO HOSOKAWA, HATEMI ICHIKAWA, SYU IKKUBO, TOSHIHIKO IKEMOTO, NORIKAZU ISHII, HAJIME ISHIKAWA, TAKEKO ISONO, HIROKO ITO, SAKIKO KAMATA, MASATOSHI KAMATA, YOSHIO KAMITANI, YOSHINORI KAMAYA, YUJI KAMOSHITA, TEIJI	KANEKO, SEICHIRO KATOU, OSAMU KATOU, YOU KITAJIMA, TSUKASA KOBAYASHI, EIJI KUEDUKA, SHIGEO KOIZUMI, TOMIKO KOIZUMI, YOSHIO KOMOTO, KENICHI KONAGAI, HIROSHI KOUNO, KIMHIKO KURAZONO, GOKI KURUYAMA, SADAYUKI MASUI, NAOE MASUYAMA, RITSUKO MATSUBAYASHI, KOICHI MATSUMOTO, RYUICHI MINAMI, RANBO MIURA, TAKEHIRO MIYAGI, TAKESHI MIYAHARA, AKIHA MIYAWAKI, TADAYUKI MEZUKOSHI, YUZO MEZUTANI, SHIGEYUKI MUROHASHI, HIROKO NABA, YUKIKO NABEMOTO, YURI NAGAI, SEIICHI NAGASAWA, SUENORI NAGASHIMA, MICHIO NAGAYA, MASATSUGU NAGOTANI, JYUN NAITO, TOSHIKI NAKABAYASHI, SOUJI	NAKAGAWA, MASAHIRO NAKAMURA, HIROSHI NAKAMURA, MIYOKO NAKAMURA, RYOKO NAKATANI, HIDEKI NANKU, SEIJI NAOE, YASUKAZU NARUKAWA, TETSUO NIKUNI, TEIKO NISHIMATSU, MINORU NOGUCHI, YUKIO OGIWARA, KAZUYUKI OHNO, MAMORU OHTSUKA, KOJI OHWADA, HIROSHI OHWADA, MAMORU OKABE, IZUMI OKAJI, TOMIO OKAMURA, HISAKO OKAZAKI, SHINICHIRO OKUMURA, KIYOHUMI OKUMURA, KUMIKO ORIHASHI, TAKESHI OZAWA, SACHIE SAKASHITA, IZUMI SASAKI, SYUJI SATO, MICHIO SATO, OSAMU SEKIGUCHI, YOSHIO SHIBATA, MASAO SHIBATA, KOICHI SHIMADA, MASAAKI SHIMIZU, SYOICHIRO SOEJIMA, TAKAO	SOMA, HIROKO SOMA, TAKENOBU SUDO, YASUO SUZUKI, KAZUKO SUZUKI, KOJI SUZUKI, YOSHIO TAGA, HIROAKI TAKAHASHI, MASANAOKA TAKEDA, TORU TAKEUCHI, SEICHI TAMURA, SHOZO TANAKA, SHINGO TASHIRO, MIKIO TERASHIMA, KUNIO TOMITA, KOJI TOYAMA, HIROMITSU TOYAMA, KEIKO TOYAMA, YOSHIO TOYOSIMA, MINEO UDAGAWA, MASATOSHI UEDA, KAZUO UFENO, MITSUO UEZONO, YOSHINORI WASHIMIZU, HIDEAKI WATANABE, MICHIAKI WATANABE, KAZUMASA WATANABE, TAKESHI WATANABE, YUTAKA YAMADA, TAKAYOSHI YAMAZAKI, SETSUO YASUDA, TADAOKI YASUDA, JUTSU
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

The first total amount: \$ 10,000—
2014.08.01



日本ルイ・アームストロング協会

日本風に桜をあしらったデザインの第1次寄贈者全員の英文リスト。ラミネート加工し、フレームを付けて副知事に手渡した

ジャズ博物館への寄金(1口1,000円)は、開館まで2年ほど続ける予定です。ご協力のほど重ねてお願い致します。

**<郵便振替>00140-4-741572
口座名 WJFニューオリンズ募金**

レーゼムさんは、この写真を選んだ時、撮影者がだれか不明だったという。後に、コンピューターでリサーチ中に撮影者が「外山喜雄」であることが判明した。

外山は、この旧造幣局の壁に掛かっている43年前に撮影した写真を見て驚いてもいない様子だった。彼は微笑んで、天を指さし、こう言った。

「ポップスが私たちにイタズラをしているんですよ」。



ツアー参加18人 写真左から古川博、渡部一勝、佐藤修、中村宏、外山喜雄・恵子、坂下泉、石井一、山田隆義、広津誠、藤崎羊一、磯野博子、中村美代子、(その後ろ)サバオ渡辺、本多幸治、佐藤美智子、小泉富子・良夫(敬称略)＝8月5日、サッチモのお墓を囲んで

7月30日、成田空港を発ってニューオリンズへの長〜い、長〜い空路 一行18人、“ジャズの故郷”からNYCへ…ジャズ満喫の旅が始まる

7月30日(水)、ちょっと遅れて午後5時前に成田国際空港を発った「サッチモの旅」一行15人は、アトランタ空港で国内線に乗り継ぎ、ルイ・アームストロング・ニューオリンズ国際空港に到着したのは、現地時間30日午後7時前。飛んでいるだけでも14時間ほどの長旅。ここで先着していた中村宏夫妻と合流、1日遅れて元衆参議院議員の石井一さんも加わり、総勢18人のジャズで満たされた“サッチモ心の旅”がスタートする。初日は、ランドリー・ウォーカー高校との交流。

スクールバスがホテルに迎えに来てくれた L. ウォーカー高校は我々の“母校”だもん

31日(木)、WJFが楽器を贈り続けているランドリー・ウォーカー高校(旧オー・ペリー・ウォーカー高校)の訪問。同校のスクールバスがホテルまで迎えに来てくれた(写真下)。同校とは、もう10年以上のお付き合い。まるで“母校”に帰るような懐かしさがこみ上げてくる。

一昨年、同校チョー
ズン・ワン
ズ・ブラス
バンド部員
らニューオ
リンズのヤ
ングバンド
とともに気



仙沼など東北の東日本大震災被災地を回ったバンド・ディレクターのウィルバート・ローリンズ先生(写真右)指揮の壮大なブラスバンドが大音響の演奏で我々を迎える(写真右の上段)。

その中で来日した部員は、もうジャロン・ウィリアムズ君(tp=同下の矢印)1人だけになってしまった。にっこり出迎えてくれた彼。まあ背が高くなって、すっかり大人の雰囲気。「ベアー」の愛称で親しまれている3年生。もうこの夏卒業とか。

ちょっぴり手前味噌になるが、“Oh! My Japanese teacher.”と言って、ローリンズ先生が私(小泉)の妻、富子の所に歩み寄って来た。そう、英語はだめだが、彼女は先生が東北を廻った際、「どうか私たちの演奏をお楽しみください」などと日本語の挨拶をお教えした“片言の日本語のセンセイ”。当時、“演奏”という発音の所を“Nso”などと書いていた。そのメモ用紙まで持ってきて、サイ

ンをせがんだりしていた。

ここバンドルームの正面左に、壁いっぱい、気仙沼のジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」から贈られた大漁旗と来日当時の写真が貼られている。その前に



今年WJFから贈られた楽器がずらりと並べられていた(写真上)。外山夫妻と広津誠・藤崎羊一・サ

バオ渡辺のセインツ5人がそこで演奏に加わると、バンドルームは次第に盛り上がる(次ページ写真中央上)。最後

は全員が室内パレード。先生たちもセカンドラインに加わって踊り出す。“心の交流”…ニューオリンズならではですね。

この後、大ホールで保護者の方々手作りの家庭料理とドリンクによる昼食会。バンドも三々五々加わってくる(同下)。



それまで姿を見せなかった来日メンバーの、小錦級の超巨漢マネージャー、タレンス・デービスさんがノッシ、ノッシと満面笑顔で現れ、ぎゅっとハグ。私の顔がお腹に埋まる。外山夫妻の“追っかけファン”、マルシア・サルターさん(鍼灸師とか)が今年もニューヨークから駆けつけ自慢のカメラでシャッ



ターを切りまくる。

**ジョージ・ルイス&ルイ・アームストロング
盛りだくさんの“史跡ジャズツアー”が…**



終わって、スクールバスを借りたまま“ジャズツアー”。まずはジョージ・ルイス宅(写真①)へ。いつもはひ孫のドミニーク・ワトキンスさんが出迎えてくれるが、今年は何やら家屋が工事中のようで人の姿はなかった。次いでジョージ・ルイスの眠るマクドナービル墓地へ。セイントとまゆみさん(ニューオリンズ在住のドラマーで今年のツアーのガイド役)が『リード・ミー・セイビア』と『バーガンディー・ブルース』を墓前に献げる(写真上)。



今年も、(それほどひどくはなかったが)炎天下でした。

その後のミニ・ツアーがまた盛りだくさん。まずはサッチモ少年が1913年元旦早朝、拳銃を発砲して逮捕されたサウランパート通りトパーデイド通りの角へ。この逮捕は、当時の新聞記事にもなっていたことが、後に判明している。“初代ジャズ王”バディー・ポールデンの家(同②=閉鎖されていた)、サッチモの生誕地(同③=交通裁判所前の広

場に碑文)、拳銃発砲騒ぎで入れられた少年院跡(同④)、サッチモの超名曲で知られるウエストエンド(同⑤)…外山さんがトランペットを出して早速『ウエストエンド・ブルース』をお披露目。红灯街ストーリービルがあったバイズン・ストリート跡を通過して午後5時頃、ホテルに戻り、すぐにモンテレオン・ホテル最上階ホールでの「サッチモ・サマーフェスト・オープニング・レセプション」へ。

**盛大にフェストのオープニング・セレモニー
VIPも次々と姿を見せセイントが音楽担当**



セイントが音楽担当となって演奏(写真下)する中、何でもありの飲み物やローストビーフなど料理もふんだんに振る舞われる。参加費65ドルも、外山夫妻のご威光?で、ツアー一行は無料ご招待となった。主催者側の主だった方々は当然、全員が顔を揃える中、地

元WWLテレビのNo.1キャスターで一昨年、高校生バンドとともに来日しているエリック&ベサニー・ポールセン夫妻(写真下)、元ダウンビート誌編集長のダン・モーガンスターンさん、ニューヨークからルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアム館長のマイケル・コグスウェル夫妻、同スタッフでサッチモ研究家のリッキー・リ



カルディ、デービッド・オズワルドさん(tuba)らも。毎年列席していて今年3月、95歳の誕生日を迎えたジョージ・アバキアンさんが体調を崩されて、ニューオリンズに姿を見せなかったのは寂しい限り。また、伝説のトランペッター、ライオネル・ファーボがフェスト直前の7月19日、誕生日の2日後、103歳で亡くなってしまったこともテレビや会場のあちこちで追悼されていたが、サッチモ・サマーフェストはいよいよ幕を開ける。

さあ本番！セインツがメインステージで大喝采あびる ジャズクルーズ、ジャズ・ミサ、壮絶トランペット・バトルへと続く

「クリストファー・イン」で本格演奏を開始 ルシアン・バーバリンがセインツに初合流

セインツの本格出番は、8月1日（金）、ジャズ博物館での義援金贈呈式の後、午後4時過ぎから予定より早めに始まった老人施設「クリストファー・イン」での演奏(写真右の3枚)。3年前までは、毎年のようにここでやっていたが、しばらく中断していた。ここで今回初めてルシアン・バーバリン(tb)がセインツに合流、セクステットの形が整い、リハーサルもなしで熱演が始まった。

テーマ曲『南部の夕暮れ』に次いで『ハロー・ドーリー！』、『ロッキン・チェア』（外山さんとルシアンがサッチモとトラーミー・ヤング並みの絶妙な掛け合いで魅せる）、恵子さんのバンジョーをフィーチャーした『世界は日の出を待っている』、会場のお年寄りも、つい腰を伸ばして踊り出す『セカンドライン』、『聖者の行進』…と1時間ちょっとの公演。リハーサルなしでもバッチリ。「ま、明日のサマーフェスト本番のリハーサルにもなりましたよ」と外山さん。

そこへランディ・ウォーカー高校にもいらしていたデトロイト・ブルックス(g,bj)のフィアンセ、不破加奈子さんが

「皆さんで召し上がってください」と、なんとおにぎりと沢庵をドーンと差し入れてくれた。「わー、すごい！ いくつぐらい作られたんですか？」と何うと、「37個です」。炊飯器で3回もご飯を炊いたそう。これに鰹節やら胡麻やいろいろまぶしてあって、和食が恋しくなっていた、一行に大好評。その場ですべて平らげられてしまった。

それより何よりツアー同行者の1人はデトロイト・ブルックスと聞いて、「えっ！？ ええー！ あのデトロイト！！」と大興奮、加奈子さんに声を弾ませて話しかけていた。

夫妻のもとに送られてきたバンジョー3点を D・ブルックス&フィアンセ加奈子さんに贈る

実は、外山夫妻とブルックス・カップル(写真上)とは、昨年のサマーフェスト以来、メールでも頻繁に交信している



友人同士。ブルックスは、いまや地元にもほとんどいなくなってしまうニューオリンズ・スタイルの若いバンジョー奏者を育てよ

うと地道な活動を続けている貴重なアーティスト。ニューオリンズ・スタイルのバンジョー奏者の恵子さんも強く関心を寄せていた。そ

んな矢先に夫妻のもとに匿名のファンからバンジョー5点(写真左下)が贈られてきた。夫妻は迷わず、日本通運のご協力を得てブルックスに寄贈した。

ちょうどブルックスが、来年1月、ニューオリンズで開催を企画している、伝説のギタリストを称えるダニー・バーカー・フェスティバル(Danny Baker Banjo & Guitar Festival)を前にした思わぬ贈り物だった。ダニーは、1970年代に銃や麻薬から子供たちを守ろうと子供バンドを創設し、ルシアン・バーバリンやリロイ・ジョーンズ、シャノン・パウエルらを育てた偉大なプレイヤー。加奈子さんが大感激したことは言うまでもない。「こんな素晴らしい結びつきが出来たのですから、それを大切にしていきたいですね」と加奈子さん。来年ご結婚とか。素晴らしい、お幸せに！

会場の周辺道路までファンで埋まる 大観衆がスタンディング・オベーション

セインツのサマーフェスト本番は、2日(土)午後3時45分からメイン会場「レッドビーナス・アンド・ライスリー・ユアーズ・ステージ」での演奏。この会場名は、サッチモが手



紙の最後に使った一言にちなんでいる。大テントの会場からあふれた観衆が周辺の道路まで埋め尽くす。クリストファー・インでの曲に加えて『バーボンストリート・パレード』『タイガーラグ』などたっぷり1時間(写真下の3枚)。アンコールの声がやまず、『この素晴らしい世界』で応える。

セインツのこのステージを『JazzTimes』誌のミック・カーロン記者は、同誌のネット版で外山夫妻が子供たちに楽器を贈り続けていることを紹介しつつ、こう大絶賛している。

「日本のサッチモ」と呼ばれる外山さんは、素晴らしいトランペットの演奏に加え、まさにサッチモのように歌う。ピアノとバンジョーの恵子夫人とともにこのバンドは、ニュー

オーリンズジャズのエッセンスをしっかりとらえている。つまりハートを込めた、スウィングな、伝統に敬意をはらった演奏—かといって、それにこだわりもしない。そして人々を愛すること

も…」ニューオーリンズの人たちは誰よりもそのことを知っている。セインツがステージを降りても、心からのスタンディング・オベーションは鳴り止まなかった。

バック・ステージに加奈子さん共々デトロイト・ブルックス

がバンジョーのお礼に来てくれていた(前ページの左下)。外山

夫妻やセインツのメンバーにサインを求めたり、握手を求めたり、記念撮影やら、毎年のように周囲が薄暗くなるまでファンが後を絶たない。

リバーボート「ナッチェス号」でジャズクルーズ



ミシシッピの川風は涼しくデキシーは軽やか

ツアー一行は、この後ミシシッピ川のリバーボート「ナッチェス号」に乗って約2時間のジャズクルーズ。ビールやカクテルで灼熱を浴び、乾いたのどを潤しながら、船上のステージでレギュラー・バンド「デュークス・オブ・デキシーランド」の演奏を楽しむ。ジャズと川風が涼やかに通り抜ける。休憩時間、リーダーのケビン・クラーク(tp)らと賑やかに交歓。次いでセインツもバンドに加わり演奏する(写真左



ミサを終えてパレードに加わる外山夫妻

下のピアニストがトロンボーン奏者になっていたのには驚いた。

サッチモを認んでしめやかに「ジ

ヤズ・ミサ」

終わってセカンドライン・パレードが街を巡る

翌3日(日)は、朝からトレメ地区にあるシドニー・ベシエも通っていたカトリック教会、セント・オーガスチン教会で恒例の地区司祭＝クエンティン・E・ムーディー師がサッチモの生誕を祝い、祈りを捧げる。外山さんと広津さんが、地元ブラスバンド&ゴスペル隊に加わって演奏する。これが午前10時から正午まで続く。教会内はエアコンもなく蒸し暑さで、汗がにじみ出る。

華やかなパレードは教会からルイ・アームストロング公園の入り口前でUターン、サマーフェスト会場まで延々と続く。お馴染みのTBC(To Be Continued)ブラスバンドの行進の中に今年も、すっかり成長したショーン君を見つけてハイタッチ。ハリケーンで被災し、ボロボロのトランペットだった彼にもWJFから素敵なトランペットを寄贈している。

フィナーレはトランペッター8人の壮絶バトル ブリザベーション・ホール中庭でパーティーも

この3日夜はサマーフェスト・フィナーレ。外山さんはトラ



ンペッター8人とともにサッチモの誕生日(8月4日)を祝つ

て、♪ハッピー・バースデイ・サッチモ…を吹いた。壮絶なバトルともいえるジャム・セッションだった。例年ならここに「天才少年」だったジョン・マイケル・ブラッドフォードが加わってくるのだが、今年もボストンのバークリー音楽大学の夏期講座にでているそうで留守。代わりに「今年もごめんね」といった感じでお母さんが駆けつけてくれた(下の写真の左から2人目)。

3日の夜は、プリザベーション・ホール中庭でパーティー。今年6月から7月はじめにかけて民音の招きで各地の12会場も回ったトラディショナル・オールスターズ(10~11面に来日公演



詳細)のリーダー、シャノン・パウエル(ds)の好意で奥様が家庭料理をふんだんに用意してくれていた。このシャノンの来日と同じメンバーは、1日午後3時から1時間サマーフ



エストの会場で熱演を繰り広げている。

ホールでは、シャノンを始め、セインツに加わっていたルシアン、それにおか

みさん会の招きで何度も浅草「ニューオリンズフェスティバル」などで来日しているウエンデル・ブルーニース(tp=ジョン・ブルーニースの弟)ら、そして外山夫妻もゲストで出演。ツアー一行は、このステージもたっぷり楽しんだ。裏庭のパーティーには、彼らも顔を見せて歓談した。それにしてもプリザベーション・ホール裏庭での貸し切りパーティーまで…決して味わえないニューオリンズ体験に満ちた、あつという間の5日間だった。

そんな“懐かしのニューオリンズ”いよいよ離れる日がやってきた。翌日4日は、ニューヨークへ発つ。

ニューヨーク編は次号83号に回します

石井一さんにとってもニューオリンズ・ニューヨーク“ジャズ心の旅”

超ホットなステージを真下から立ち見で応援、「君たちが一番受けていた！」

石井一さんといえば、1969年初当選以来政界で活躍、自治大臣、国土庁長官も務め、豪快な政治家として知られている。石井さんのお父様、石井廣治さんは、日本マーキュリーの社長として、1953年、不滅のジャズグループJATPを日本へ招聘日本にジャズブームをもたらした立役者。終戦後8年の日本、廣治さんが全国から集めた当時珍しかったオープンカー20台を連れ、エラ・フィッツジェラルド、ジーン・クルーパー、ベン・ウェブスター…そうそうたるジャズメンの乗る車列の先頭に石井さん運転の車。お父様の廣治さんとJATPの創設者、ノーマン・グランツが乗り、高速もない時代銀座まで2時間のパレードだったが、沿道は人であふれたという。

ご自身もかつてテナーサックスを吹き、大のジャズファンの石井さんが、日本音楽家協会会長をされていたのもそういうJATP、“ホットな”ジャズ、そし

てお父様への思い入れから。今回、以前から私たちの熱い“ホットな”ジャズ・ツアーに注目されていた石井さん、ジャズへの情熱冷めやらず、また、これ

も“ホットな”ニューオリンズを一度体験したいと、単身ツアーにご参加くださった。

“超ホットな”サッチモ・サマーフェストのセインツのステージ、石井さんは、ステージに顎を乗せるようにして、立ち見で応援してくださり、「現地のバンドのパワーに君たちは大丈夫かなと心配したが、一番受けていた！」と嬉しいコメント！

ニューヨークでは、1953年JATP羽田到着の思い出の写真を、ハーレムのジャズミュージアムに寄贈するという、石井さんにとってのジ



「ナッチェス号」で私たち夫婦と

ジャズ心の旅、を体験して頂くことが出来た。

次号、NY編で、詳しくご紹介しましょう。(外山)

瀬川昌久 presents「JAZZ | LOVE—サッチモから日本のジャズまで—」

トップ・アーティストも卒寿を祝って駆けつける

貴重なジャズの映像を交えたタップダンスや日本版サッチモ・オールスターズ熱演



セインツ+関泰子さん(v)らの演奏にステージ横で司会の鈴木さん(左端)ともども終始、熱心に耳を傾けていた瀬川さん(その右)

超満員だった渋谷の大和田伝承ホール

瀬川昌久 presents 「Jazz | Love—サッチモから日本のジャズまで—」と題したコンサートが2014年6月17日(火)、東京・渋谷大和田伝承ホール(定員345名)で開催された。日本ポピュラー音楽家協会主催(瀬川さんは同協会専務理事)、日本レイ・アームストロング協会、日本ビジュアル著作権協会協力。

会場は満席の盛況で、開演前にステージではジャズ映画、「真夏の夜のジャズ」、「五つの銅貨」、「ニューオーリンズ」、「ハロー・ドーリー！」および1936年コペンハーゲンでの若き日のルイの「ダイナ」など、サッチモ登場シーンが上映され、オーバーチュアとしてコンサートへの期待が客席で高まる。

懐かしい！あの鈴木治彦さんが司会

定刻午後6時、司会の鈴木治彦さんが瀬川さんを紹介、ブラックタイに身を包んだ瀬川さんに「本日は、たつぷりと瀬川さんのジャズのお話をお聞きしたいと思います。まず瀬川さんはいつごろからジャズを聴いていたのですか？」という質問に「3歳の時、ロンドンにいてジャズのレコードを聴いていました」とのコメント、会場からため息が漏れた。



菊地成孔さんがスペシャルトーク

オープニング・トークはスペシャル・ゲストの菊地成孔さん(サクソ奏者)=写真上の右。「ジャズとダンスが切り離されて、ジャズは議論の音楽となってしまったのですね。瀬川さんが奥様とジャズで長時間にわたって踊られるのを拝見して、ジャズを楽しむということに深く共感しました」とのトークに大きな拍手が会場から寄せられた。

まずは“ジャズの歴史”ライブで開演

ステージではライブ演奏がスタートする。

第1部「サッチモから日本のジャズまで」

●サッチモ・ジャズの歴史

外山喜雄&デキシーセインツ+ゲストミュージシャンによる、サッチモを軸としたジャズの歴史が再現される。

瀬川さん解説「ルイが生まれた1901年のころ、米国ではラグタイムが大流行していました。スコット・ジョプリンの名曲“ジ・エンタテイナー”をお聴きください」

1. ジ・エンタテイナー

ピアノ曲CDの音源から始まり、ライブ演奏に移るといふ、瀬川さん監修のWJF例会ではおなじみの演奏構成。

2. デキシー・ジャズ・バンド・ワン・ステップ

瀬川さん解説「ジャズレコードの初吹き込みは1917年、白人のオリジナル・デキシーランド・ジャズ・バンドによるものでした。当時の録音を聴いていただき、それに続いてバンドの演奏に移ります」

3. ディッパー・マウス・ブルース

瀬川さん解説「1922年、キング・オリバーはシカゴの自分のバンドにルイを呼びます。ディッパー・マウスとはルイのあだ名で、柄杓のような大きな口という意味です」

4. シュガー・フット・ストンプ

瀬川さん解説「ルイはニューヨークのフレッチャー・ヘンダーソン・バンドに参加、その際ディッパー・マウス・ブルースを持っていき、“シュガー・フット・ストンプ”としてビッグ・バンドで演奏、ルイの3コーラスソロが大変な評判を



写真上段から下段へ(左から)恵子、関、広津、鈴木、外山、(後ろ)藤崎、下間、粉川、(後ろ)渡辺の皆さん

杓のような大きな口という意味です」

呼びました。本日は外山さんにそのソロを再現していただきますよう」

「この曲はベニー・グッドマン楽団でも演奏しており、ハリー・ジェームスがルイのソロをプレイしています。CDで聴いてみましょう」

「グレン・ミラーはトロンボーンで、ディッパー・マウス・ブルースのルイのフレーズをプレイしています。”Oh, Play that thing!”の掛け声も同じです。当時のジャズマンは本当にルイを尊敬していたのですね。グレン・ミラーの演奏をCDで聴いてください」

5. ヒービー・ジーベーズ

瀬川さん解説「ニューヨークからシカゴに戻ったルイはホット・ファイヴ、ホット・セヴンのバンドを結成、ジャズ史に残る斬新な即興ソロを演奏しました。そしてその時、最初のスクヤットを録音に残したのはルイでした。曲の吹き込み中に歌詞カードを落としてしまい、即興でフレーズを歌ったと伝えられています。ここでは、外山さんにそのシーンを再現していただきますよう」



6. ウェストエンド・ブルース

瀬川さん解説「ルイの数ある名演の中でも特に有名な曲です。イントロのトランペットによるカデンツァを外山さんの演奏でお聴きください」

各所に瀬川さんの的確な解説が入る

●昭和ジャズソング

7. ダイナ

瀬川さん解説「昭和9年、日本ではディック・ミネが吹き込みをしました。南里文雄のイントロを下間哲さんのトランペットで再現、ボーカルはベースの藤崎羊一さん、そしてバイオリンの関泰子さんに参加していただきます」

8. あほ空(マイ・ブルー・ヘブン)

瀬川さん解説「日本のジャズソング第一号は昭和3年吹き込みのマイ・ブルー・ヘブんです。アラビアの唄も同年でした。ボーカルは祥子さんと外山さん、トロンボーンは粉川さんも一節ボーカルで参加です」

9. ラッパと娘

瀬川さん解説「マーサ・レイ主演の映画“画家とモデル”にインスパイアされた服部良一が作曲した“ラッパと娘”をボーカル、祥子さんとトランペット、下間哲さんでお送りします」

第1部終了のステージでは、ミュージック・ペン・クラブ特別功労賞受賞の瀬川さんに、同クラブより大きな花束が贈呈された。



第2部「ジャズで踊って～フレッド・アステア流タップ・ダンスショー」

第2部のステージに登場したのは、瀬川さんおひとり。「戦前のジャズの時代にタップダンスは欠かせないものでした。そしてその時代のスターダンサーがフレッド・アステアだったのです。本日はフレッド・アステアのタップダンスの楽しさを、JAM TAP DANCE COMPANYのおふ

たり、白川希、三寺郷美さんに踊っていただきます。曲目はビギン・ザ・ビギン」

1. ビギン・ザ・ビギン

瀬川さん解説「映画“踊るニューヨーク”からアステアとエリナ・パウエルのタップダンスシーンの再現でした。続いては“有頂天時代”(1936年)より、アステアとジンジャー・ロジャーズのダンスをお楽しみください」



2. ピック・ユアセルフ・アップ

瀬川さん解説「原題は SWING TIME, ボール・ルーム・スタイルのダンスですね。さて次は 3 曲メドレーでタップダンスをお届けします」

3. トップ・ハット～ボー・ジャングル・オブ・ハーレムア～プッティン・オン・ザ・リッツ

第3部 戦後来日のサッチモ・オールスターズとジョージ・ルイス

第3部の冒頭、司会の鈴木治彦氏が昭和28年、サッチモが来日、東京、有楽町の日劇で公演した時のプログラムを持参、それをみて瀬川さんは「トラミー・ヤングのトロンボーン、バーニー・ビガードがクラリネット、ミルト・ヒントンのベース、ボーカルはベルマ・ミドルトン、このころのベルマは痩せていましたね。戦後のサッチモ・オールスターズの錚々たるメンバーでした」と懐かしそうに語り「では、ルイのオールスターズの演奏から“ベイズン・ストリート・ブルース”をお聴きください」

1. ベイズン・ストリート・ブルース

瀬川さん解説「戦後の日本における、特筆すべきジャズシーンのひとつに、ジョージ・ルイスの来日があります。ニューオリンズ・ジャズの楽しさを伝えてくれました。クラリネットの鈴木孝二さん、バンジョー外山恵子さん、ベース藤崎羊一さん、ドラムス、サバオ渡辺さんのカルテットで“バーガンディー・ストリート・ブルース”を演奏します」

2. バーガンディー・ストリート・ブルース

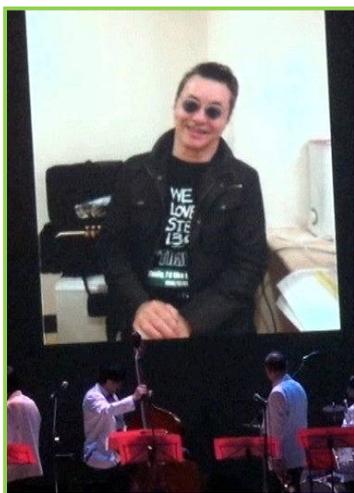
瀬川さん解説「全米ヒット・チャートで1位となった“ハロー・ドーリー!”を祥子さんと外山さんのボーカルでお届けします。本日最後の演奏となります」

3. ハロー・ドリー！

第3部が終了すると、ステージのスクリーンに映写されたトランペッター日野皓正さんのビデオ・メッセージ。

「瀬川さん、90歳のお誕生日おめでとうございます」が流れ(写真右)、日野さんのトランペットで“ハッピー・バースデー”のメロディーが会場に響きわたった。

ステージでは、瀬川さんに外山恵子さん、瀬川さんのお孫さん、島崎凜子さんから花束が贈られ、お祝いにかけつけた北村英治さん(cl)、阿川泰子さん(vo)、寺井尚子さん(vln)がお祝いのメッセージと“ス・ワンダ



フル”の演奏をプレゼントした(写真下)。

演奏メンバー：

「外山喜雄&デキシーセインツ」

外山喜雄(tp/vo)、外山恵子(p/banjo)
鈴木孝二(cl/a.sax)、粉川忠範
(tb/vo)、藤崎羊一(b/vo)、サバオ渡辺
(ds)

ゲスト：広津 誠(cl/t.sax)、関 泰子
(vl)、下間 哲(tp)、祥子(vo)



レストランを借り切ったの盛大な祝賀パーティー おや!? 喜雄さんがバンジョー、恵子さんは手拍子

コンサートが終了したあと、会場1階にあるイタリアンレストラン全館を借りきって盛大な祝賀パーティーが催された。

そこで音楽を担当していたのがセイインツ。なんと喜雄さんがバンジョーを弾き、愛器をとられた恵子さんは手拍子(写真上)。そういえば恵子さんにバンジョーを教えたのは、ほかならぬこの喜雄さんって伺ったことがある。

その横の大きなスクリーンに瀬川昌久さんの半生を詳細に振り返った画像、映像が映し出され、みなさんの目がスクリーンに釘付けになる。

その“みなさん”がまた豪華。控え目に隅っこにたたずんで入らした瀬川夫人やご家族、北村英治さん、阿川泰子さん、寺井尚子さんら出演アーティスト多数、プロデューサーの佐藤美枝子さんら主催者側はもとよ



瀬川さん(右)の“卒寿記念コンサート”を祝って乾杯の挨拶をする白井克彦さん

り、ざっと見渡ただけでもこんな方々がいらした。

白井克彦さん(日本ポピュラー音楽家協会会長/前早稲田大学総長)、前田憲男さん(ピアニスト/編曲家)、雪村いづみさん(歌手)…。

協力・日本ルイ・アームストロング協会ですからWJF会員のみなさんもずいぶんとコンサート会場にいらしていたが、こちら中村宏さんご夫妻、佐藤修さんご夫妻、磯野博子さんらVIP(写真左)も祝賀パーティーで乾杯！



協力・日本ルイ・アームストロング協会ですからWJF会員のみなさんもずいぶんとコンサート会場にいらしていたが、こちら中村宏さんご夫妻、佐藤修さんご夫妻、磯野博子さんらVIP(写真左)も祝賀パーティーで乾杯！

MIN-ON JAZZ SELECTION LIVE デキシーランド・ジャズの祭典 2014

外山夫妻をナビゲーターに12都市でスウィング!

Shannon Powell New Orleans Traditional All-Star Jazz Band

あのシャノン・パウエルが率いるトラディショナル・オールスター・ジャズバンド一行8人が6月18日、来日した。“あのシャノン”としたのは、外山夫妻がニューオリンズでのジャズ修行時代(1968~73)から親しくしていたドラムの天才少年だからだ。当時から「シャノンがどんなミュージシャンに育っていくのか?」と楽しみにしていた夫妻のもとへの“凱旋”である。そのコンサート『MIN-ON JAZZ SELECTION デキシーランド・ジャズの祭典』で、夫妻はナビゲーター役として全12公演20日間の旅に同行した。そんな夫妻の計らいで公演前日のリハーサルやら、つくば・ノバホールと中野サンプラザでの2公演に密着させていただいた。ご報告します。

(小泉良夫)

人気沸騰! チケットは12公演すべて完売 客席はどこもスウィング! 熱狂渦巻く

一行は6月20日から7月6日まで平塚、つくば、名古屋、新発田、旭川、札幌、北斗、帯広、小山、岡谷、東京、那須…と12都市を回った。バス、新幹線、ヒコーク、タクシー

…。なかでも新潟・新発田での公演のあと新潟空港から札幌空港へ飛んで札幌滞在。帯広までは専用バスで6時間もの移動だった。そんな過酷な移動にもかかわらず、外山夫妻は感慨を込めて言う。

「到着した先々でタクシーが列を連ねて私たちを待っていてくれるのです。そして各会場に着くと、もうドラムセット

がきっちりセットとされていました。日程こそ、きつかったのですが、本当に(主催・民音の皆さまのお心配りで)ストレスもなく、すべてスムーズにこなしていくことが出来ました」と。

その12公演すべて1500~2000席完売、どこも熱狂の渦! そんなムードをこちらは中野サンプラザでもしっかり味わうことが出来た。ここ2200超の座席もすべて埋め尽くされていた。実況しましょう。

第1部 ジャズの街、ニューオリンズへ… レッツ・ゴー!

幕が上がる。左手から外山夫妻がスポットを受けて登場。1962年生まれのシャノンがまだ10歳くらいの頃の微笑ま

しいエピソードの数々を紹介する。「さあ、そのシャノンです!」。と、ドラム席がぱっと明るくなる。なんとそこにシャノンが座っていた…にこやかに立ち上がって客席に手を振り、挨拶を送る。恵子さんがバンドの一人一人を英語で紹介、呼び出す。左右からゆったりと全メンバーが席に着き、



まずは軽快に『バーボン・ストリート・パレード』の演奏。終わって「いかがでしたか? ニューオリンズにやっ

てきたって感じですね」。言われるまでもなく、もうニューオリンズのまっただ中。

シャノンのボーカルを入れた『アイスクリーム』が続く。♪I scream, you scream, we all scream for ice cream! いったったか、恵子さんのこの熱唱を思い出しました。メン

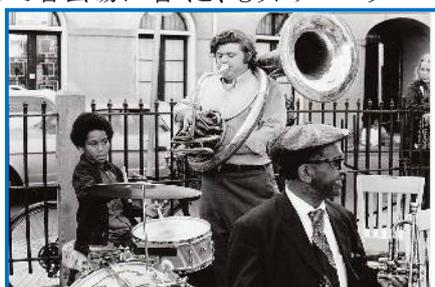
バー唯一の女性、タニアが入って『イグザクトリー・ライク・ユー』など熱唱、シャノンのドラムソロが激しく爆発する。もう100年も前から歌い継がれて



いる『リル・ライザー・ジェーン』では、バンドと共に客席もこの名を何度も呼びかけ、バンドと一体になる。

第2部 ジャズの故郷、ニューオリンズの伝統

15分の休憩を挟んで第2部は、まず外山夫妻がシャノ



“天才少年”といわれたころのシャノン(写真上の左)…で、今は“生きる伝説”とか(写真右)

ンにインタビュー。シャノンが育ったニューオリンズのトレメ
地区(いまでもとっても危なそうな地区)には、教会があっ
て、そこではいつもゴスペル、ブルース、ジャズが奏でられ
ていた。シャノンの子供時代の音楽をたどることでジャズ
の生い立ちを

感じてもらう
という第2部。
彼は6歳のころ
教会でドラムを
始め、外山夫
妻が修行中に



は、すでに天才少年としての頭角を現していた。「まだ足
がペダルに届かない。小さな可愛い少年でした」と夫妻。

シャノンは何やら首から胸におかしな板を掲げて外山
夫妻のところへやってきた(写真上)。そうです、デキシーフ
アンなら、どなたもご存じのあのウォッシュボード(洗濯板)
です。

手元のものは何でも楽器になってしまう！

貧しかった“ジャズの故郷”ニューオリンズ人たちは、手
元にあるものは何でも楽器にしてしまいました。ウォッシュ
ボードがその最たるもの。シャノンはスプーンを2つ合わ
せたものを叩いて、素晴らしいリズムを刻む。外山さんは

櫛と布に息を吹き込み、ジャ
ズを吹いてみせる。コルネット
奏者のケビンがなんかお
椀みたいなものを持って来
た。そう、ミュートなどでラッ
パの前に当てるもの。なん
だ！？ 外山さんがその先
に棒を差し込む…何と！トイレ
掃除の吸盤ゴム…こんな
ものも使われていたんです
ね。なんだって楽器にならな
いものはないんですよ。それ
らを使っの古き良き、最高
のデキシ『タイガー・ラグ』が演奏される。みんなジャズ
の歴史の中にも吸い込まれていく。



ついで『セカンドライン』。曲の始めにバンドの呼びかけ
に、みなさんウォー！と答えるんですよね。始まりました。
外山さん、「まだ元気がありません！ 立ち上がって、手を
高く伸ばして下さい！」「あ、まだ立ち上がっていない方
がいますよ！」で、満場総立ち。

タニアのボーカルが続く(写真下)。『バーズンストリート・
ブルース』。この曲はいつ聴いてもミシシッピ河を目の前に
ゆったりと流れさせ、あの時、あの思い出を甦らせてくれる。
私も幾多の思い出がほとぼり出てくるんです。まいった
なあ。

セカンドラインの音楽、そしてブルースと並んだ
ところで…忘れてはならないのが黒人教会のゴス
ペル。シャノンが牧師さんの説教を気取ってゴス
ペルを歌い上げる。6歳からの経験がみについたスィ
ング感あふれるタンバリンソロも出てくる。

そして忘れることが出来ない、ジャズ葬式の音楽。
『主の御許近くに』…。

「一番素晴らしいのはお葬式の音楽です」

ルイ・アームストロングがかつて言っていた。「美
しい音楽と言ったら、一度、ニューオリンズのお葬式



の音楽を聴
いて欲しい。
ミュージ
シャンが、まる
でオペラ歌
手が歌うよ
うに、楽器で
悲しさや美
しさを、心か
ら歌い上げ

るのです。
そでにさがっていた管楽器のメンバーが、タニア共々
おごそかに、しめやかに葬送曲を奏ながらゆったり
とした足取りで登場、ターニャが歌い上げる。

外山夫妻が解説する。

「亡くなった方を墓地まで運んでいきました。そ
こで埋葬された方、その人生はいろいろ苦しいこと、
辛いこともあった
でしょうが、ここに埋葬されたあなたは、もうすべ
てこの世の煩惱から解放されたのです…」。しめや
かなムードは一変して、ハイになる。

墓地からの帰路、そんな人生を悟った人たちがセカ
ンドラインとなる。開場でも『聖者の行進』が巡る(写真左)。

♪Oh, Lord, I wanna be in that number…次々と傘を手
にしてパレードに加わる方々も、いつになく多かった。
これで終わるわけがない。アンコールの声が高鳴る。

締めめの1曲は『この素晴らしき世界』。まさにこの一
連のコンサートを締めくくるのにふさわしい1曲。外山夫妻
とバンドの全員が手を取り合ってステージ最前列に並ぶ。
なんかミュージカルのフィナーレといった感じ。

一行は、この中野サンプラザ公演のあと7月6日、ツア
ー最後の那須野が原ハーモニーでの公演も、大歓声の中
に終え、帰国した。

(写真はすべて「つくば・パホール」公演での撮影)

**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます**

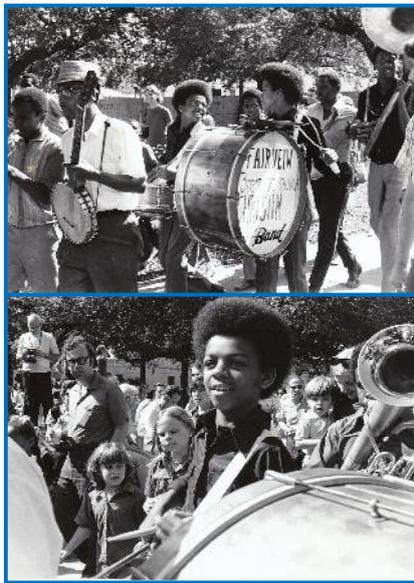
- ◆九段ライオンズクラブ様 (文京区) 50,000 円
1994年以来、『銃に代えて楽器を』の活動をご支援いただいています。ご夫妻での賛助会員、松村善一様、世枝様を通じて、昨年クリスマスにご寄附いただきました。
- ◆鈴木鐵雄様 (会員、松戸市) 10,000 円
- ◆森田育弘様 (会員、東京・北区) 10,000 円

**不思議な‘縁(えにし)’が続く
これもサッチモのイタズラ! ?**

タイムスペキュン紙で2003年からニューオリンズと私たちの交流を追ってくださっている、新聞記者のシーラさんが、‘ポップス(サッチモ)が天国で私たちにイタズラをしているんですよ’という、私たちの気持ちをご記事にしてくれています(5面)。

楽器を贈ろうという活動のヒントは、もちろんサッチモが銃を発砲して入れられ少年院で手にしたコルネットでした。でも、同時に

忘れることが出来ないのが、私たちの修業時代ニューオリンズで出会った、子供のジャズマンたちでした。家庭の事情で父母と別れ住んでいた天才ドラマー、シャノン・パウエル。そして、NYで長年活躍したギター/バンジョー奏者、ダニー・バーカー(右写真上段の左、バンジョー奏者)が1970年に、子供たちを音楽で非行から救おうと始めた子供ジャズバンド、フェアビュー・バプチスト教会バンド。今はニューオリンズ一番のトロンボーン奏者となったルシアン・バーバリンは、フェアビューの可愛いアフロヘアーのスネア・ドラマー(写真右上の2枚)でした。今年、6月から8月にかけて、奇跡のように…“この子達”との共演が次々と実現しました。お父さんがいなくて、お母さんも、事情があつて彼を世話できず、おばさんとおばあさんと暮らしていたシャノン、9歳。さびしかったのでしょうか、彼にとって、私たちは、家族のような存在、そして父母替わり…のような感情を持っていたのです。



民音の主催で、この“シャノン少年”とのツアーが実現！ (11～12面)公演の素晴らしさに感動された主催者からお礼のパーティーを開いていただきました。そんな歓迎の中で、シャノンが、

1973年、私たちが帰国したとき心から悲しかったこと…そして、母代わりのおばさんも、おばあさんも、ヨシオとケイコは知っているんだという、感極まって泣き出し、私も、ついつい、ワーンと大泣きになってしまいました。自分でも驚くような、大声をもらしての号泣。あのころの思い出が、いろいろ湧き上がってきました。

そして今年8月、ニューオリンズでのサッチモ・サマーフェスト…。私達セインツのステージでトロンボーンを吹き、歌ってくれたのは、フェアビュー少年バンドにいたルシアンでした。私と彼、2人のコンビは、まるで、サッチモとトラミー…ジャズ祭で一番喜ばれたステージになりました(8～10面)。

フェアビュー少年バンドと多くの子供達を育てたダニーを称えた、ダニー・バーカー・フェスティバルが企画されています。なんと、不思議なことにタイミングを合わせたように、日本でバンジョー5台のご寄付が届き、日本通運のご協力で、ジャズ祭を立ち上げているギター奏者デトロイト・ブルックスへ今回贈呈することもできました(8面)。

そして、皆様のご協力で実現したジャズ博物館再開への寄付は、楽器を贈り始めるヒントになった、“サッチモが少年院で手にしたコルネット”の前で贈呈されました(1面)。

このほかにも…もともとサッチモのイタズラと、不思議な縁(えにし)が続きましたが…またの機会にご紹介とさせていただきます。皆様に、心より感謝申し上げます！！

(外山喜雄 恵子)

募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

＝WJF年会費＝

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>

編集長から

高原での爽やかな「第8回斑尾ジャズ・フェスティバル」(8月23～24、WJF協力)に参加してきました。ゲストで特別審査員の瀬川昌久先生とステージや楽屋で一緒に過ごさせていただきました。瀬川先生プロデュース「JAZZ I LOVE」コンサート(6月17日、渋谷の模様は13～15ページに掲載)です。▼斑尾ジャズへの司会者としての参加は今年で8回目となりますが、毎回ニューオリンズでのサッチモ・サマーフェストの記念Tシャツをステージで着用しており、本年2014年バージョンのTシャツはブルー地にサッチモのイラストが大きく描かれたもので、会場内で大評判でした。外山夫妻からのこのお土産Tシャツは、多分国内ジャズ・フェスで初の着用だと思えます。▼そのサッチモ・サマーフェストも含む2014年「サッチモの旅」はトップページから10ページにおよぶ特集企画で紹介されています。中でも匿名のファンから寄贈されたバンジョー5点のエピソードは、学生時代からバンジョーを弾いている私にとって興味深いニュースでした(8ページ)。ニューオリンズで来年開催が予定されるダニー・バーカー・フェスティバルでこれらのバンジョーが活躍するシーンを想像するだけで、ワクワクドキドキです。(山)